2025 年 10 月 12 日　　西村隆星

主題「神の熱心に応える者として」

ルカの福音書 14:15-24-

序

前回に続いて、今日は宴会のたとえから、「神の招き」について共に考えていきたいと思います。今日は、ある人が盛大な宴会を催し、大勢が招かれている、そんな場面です。宴会に行く機会があまりない方もいるかもしれませんが、もう少し馴染みのある言い方をするなら、ホームパーティーでしょうか。もしかしたら、この軽井沢ではよく開かれているかもしれません。友人や知人に「一緒に楽しもうよ」と招待してもらえたら嬉しいものです。たくさん人がいる中で、「あなたに来てほしい」と思ってもらえること、それ自体が喜びですよね。

我が家も時々、お客さんを食事に招きます。日程を合わせて、その日を子どもたちも楽しみにしながら準備をします。ですが、時々「やっぱり行けなくなりました」となることがあります。体調が悪くなったとか、どうしようもない理由なら残念だけど仕方がない。でも、めんどうくさくなったとか、後から決めた他の人との予定を優先していたら、少し悲しい気持ちになるかもしれません。

今日の箇所は、まさにそんな場面から始まります。宴会に招く主人と、招かれた人々のやり取りです。それでは 15 節をご覧ください。

１．宴会を断る理由

> ***イエスとともに食卓に着いていた客の一人はこれを聞いて、イエスに言った。「神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう。」***

ここで急に一人の人が言うんです。「神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう」と。この発言をしたのは、パリサイ人か律法学者。これまでのイエスの話を聞いて、自分は間違いなく神の国で食事をすることが出来る、大丈夫だ、と思ったからこそ、彼はそう言ったわけです。そんな彼にイエスは言われた。16-20 節。

> ***するとイエスは彼にこう言われた。「ある人が盛大な宴会を催し、大勢の人を招いた。宴会の時刻になったのでしもべを遣わし、招いていた人たちに、『さあ、おいでください。もう用意ができましたから』と言った。ところが、みな同じように断り始めた。最初の人はこう言った。『畑を買ったので、見に行かなければなりませ***

ん。どうか、ご容赦ください。』別の人はこう言った。『五くびきの牛を買ったので、それを試しに行くところです。どうか、ご容赦ください。』また、別の人はこう言った。『結婚したので、行くことができません。』

ここでポイントになるのは、ある人が宴会を開き、大勢の人を招き、皆はじめは受け入れていた。しかし、宴会の時刻になってしもべが招いた人たちを呼びに行くと宴会に招かれていた人はことごとくその招きを断った。

最初の人はこう言った。『畑を買ったので、見に行かなければなりません。どうか、ご容赦ください。』別の人はこう言った。『五くびきの牛を買ったので、それを試しに行くところです。どうか、ご容赦ください。』また、別の人はこう言った。『結婚したので、行くことができません。』

どの理由も自分由来の都合です。畑を買ったから行けない。しかし畑を買ったからこそもうその土地は自分のもの。いつだって見に行くことはできるのに行かない。次に五くびきの牛、つまり５ペアの牛、オスとメスを五匹ずつ買って、その牛たちがちゃんと働いてくれるか試さないといけないから行けないと断った。そもそも宴会の日時は聞いている。今それをしないといけない理由もない。それなのに、今「行くところ」。とても自分勝手な言い訳をしているわけです。最後に結婚したから行けないと断った人。これは聖書に書かれていることを理由にしている。申命記 24:5 にはこうあります。

人が新妻を迎えたときは、その人を戦に出してはならない。何の義務も負わせてはならない。彼は一年の間、自分の家のために自由の身になって、迎えた妻を喜ばせなければならない。

しかしこれは、結婚した人が戦争に行くことから守るために定められた決まり。戦争でも何でないのに、結婚したから行けないというのも理由になってないんです。三人に共通しているのは、「最初は招きを受けていたのに、あとから理由をつけて断っている」ということです。彼らはまるで、宴会に行きたくない、行かないで良い理由を引っ張り出してきたかのようです。

２．誰を招くのか

そのような結果を持ってしもべは帰ってきて報告した。案の定、家の主人は怒ってしもべに言った。

『急いで町の大通りや路地に出て行って、貧しい人たち、からだの不自由な人たち、目の見えない人たち、足の不自由な人たちをここに連れて来なさい。』しもべは言った。『ご主人様、お命じになったとおりにいたしました。でも、まだ席があります。』すると主人はしもべに言った。『街道や垣根のところに出て行き、無理にでも人々を連れて来て、私の家をいっぱいにしなさい。言っておくが、あの招待されていた人たちの中で、私の食事を味わう者は一人もいません。』」

宴会に最初に招かれた人たちがその招きを断った結果、違う人たちが宴会に招かれた。招かれた人たちは、「大通りや路地」にいた「貧しい人たち、からだの不自由な人たち、目の見えない人たち、足の不自由な人たち」。しかし、それだけでは足りなかった。それゆえに、家の主人はさらに「街道や垣根のところ」にいた「人々」を無理にでも連れてきて、家をいっぱいにするように言った。その結果、「招待されていた人たちの中で、私の食事を味わう者は一人も」いないのだ、と家の主人は宣言した。

最終的にこの宴会に招かれたのは、「大通りや路地」にいた「貧しい人たち、からだの不自由な人たち、目の見えない人たち、足の不自由な人たち」。そして「街道や垣根のところ」にいた「人々」。彼らは主人に遣わされたしもべによって探された。どこにいるのか、町の大通りだけではなく路地を探し、街道だけでなく、道路に沿った垣根まで探した。それも無理にでも。これは無理やり、力づくでということではない。そうではなく、こちらに来なさい、と説得し、招いたということ。

結論　神の国の祝宴に招かれて

ここに家の主人の熱心が示されている。何としてでもこの宴会に来て欲しい、家をいっぱいにしたいのだ、という熱心がある。ここで描かれる家の主人。これはもちろん、神を指しています。そしてこの宴会へ招く熱心というのは、旧約の時代から続いているものです。神は神のことばを預かる者たちを通して何度も、何度も招かれた。そしてイエスがこの地上に来た時、神の国の宴会へと招かれた時、応答するか、しないかが問われている。

本日の箇所の「貧しい人たち、からだの不自由な人たち、目の見えない人たち、足の不自由な人たち」「街道や垣根のところ」にいた「人々」は異邦人を指します。神の民の外側にいた彼ら。しかし、神の民とされていた内側にいるユダヤ人たちは、この招きを拒んだ。

この「大通りや路地の人々」「街道や垣根のところの人々」が異邦人ということは、つまり私たちのことです。神の民の外側にいた私たちが、この宴会に招かれた。それは、神のあわ

れみ以外の何ものでもありません。けれども、そのあわれみをあわれみとして大切に受け取っているだろうか、と思わされます。神の愛に、あわれみにすっかり慣れてしまっている。忙しいから、気分がのらないから、今は余裕がないから…。最もらしい理由を自分の中に見つけ、「招き」に応えようとせず、他の人にこの恵みを伝えることも、つい後回しにしてしまう。

気づけば、あの宴会を断った人たちと同じような姿が、自分の中にもあるのかもしれません。神のあわれみを受けながら、そのあわれみに鈍くなってしまう。しかし、それでも神さまは諦めずに、「さあ、おいでください」と私たちを招いてくださる。その招きは今も続いているんです。

だからこそ、私たちは問われます。神の招きに応えるかどうか。家の主人がしもべを用いて探されたように、異邦人の救いを願っておられる。それも「急いで」。家の主人は宴会の席に集う人を集めることを急いだ。ここにはこれまでも語ってきたように緊急性があるわけです。なぜなら、神の国の宴会はすでに準備されていて、もう始まろうとしているからです。だからこそ、私たちも同じ思いを持ちたいんです。〇〇があるからと、宴会に招かれているのに断るのか。それともそれこそが幸いだと受け取るのか。色んな言い訳をしながらイエスのもとに行くのではない。そうではなく、しもべがなしたように、「大通りや路地」に「街道や垣根のところ」に出て行き、「貧しい人たち、からだの不自由な人たち、目の見えない人たち、足の不自由な人たち」に伝えたい。そして神の国の食卓に着けるように主の熱心をもって伝えたいのです。

なぜなら、私たち自身が、罪ゆえに以前は「貧しい人たち、からだの不自由な人たち、目の見えない人たち、足の不自由な人たち」であったからです。自分の好きなように生きていた不自由な者であったんです。しかし、神の愛ゆえにまことのいのちを与えられた私たちは、「神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう」と心から言える。これこそが、本当の幸いだと。この幸いを知っているからこそ、伝えていくんです。ここに本当の幸いがあります。これを知らないのは本当に勿体無い。これこそが人生を変える最高の良い知らせだと心から伝えていく。そうやってしもべが宴会に家がいっぱいになるように、連れてきたように、私たちも私たちの主人である神のもとに一緒に行きたい。私たちに託された歩みを担いつつ共に歩んでいきましょう。